

1. (1) ① $\frac{30}{7}$ ② 32 : 49 (2) $5\sqrt{2}$

解説

(1)① 線分 AB は円 O の直径より、 $\angle APB = 90^\circ$ だから、三平方の定理より、 $AP = \sqrt{10^2 - 6^2} = \sqrt{64} = 8$ また、図 1 のように、点 B を通り辺 AP に平行な直線と線分 PD との交点を R とすると、 $\angle BRP = \angle APR = 45^\circ$ より、 $\triangle BPR$ は $BP = BR = 6$ の直角二等辺三角形となる。ここで、 $\triangle APC \sim \triangle BRC$ だから、

$$CA : CB = AP : BR = 8 : 6 = 4 : 3 \text{ となるので、} CB = 10 \times \frac{3}{4+3}$$

$$= \frac{30}{7} \quad \text{②} \quad \triangle ABP = \frac{1}{2} \times 6 \times 8 = 24, \quad CA : CB = 4 : 3 \text{ より、}$$

$$\triangle ACP = \frac{4}{7} \triangle ABP = \frac{96}{7}, \quad \triangle BCP = \frac{3}{7} \triangle ABP = \frac{72}{7} \quad \text{一方、} \angle APD = 45^\circ \text{ より、} \angle AOD = 45^\circ \times 2 = 90^\circ \text{ であるか}$$

$$\text{ら、} \triangle BCD = \frac{1}{2} \times CB \times DO = \frac{1}{2} \times \frac{30}{7} \times 5 = \frac{75}{7} \quad \text{よって、} \triangle ACP : \triangle PDB = \frac{96}{7} : \left(\frac{72}{7} + \frac{75}{7} \right) = 32 : 49$$

(2) 弦 AP の垂直二等分線は、点 P がどこにあっても円の中心 O を通るので、弦 AP の中点を M、 \widehat{AB} の中点を E とし、図 2 の (ア)、(イ) のように、点 P が \widehat{BE} 上と \widehat{AE} 上を動く場合に分けて、 $\angle OQD$ の大きさを考える。どちらの場合も $MQ \parallel PB$ だから、(ア) の場合、 $\angle MQP = \angle BPQ = 45^\circ$ より、常に $\angle OQD = 180^\circ - 45^\circ = 135^\circ$ (イ) の場合、常に $\angle OQD = 45^\circ$ ここ

で、 $\angle OQD = 45^\circ$ が円周角となる図 3 のような円 S を考えると、図 2 の (イ) の場合の点 Q は \widehat{OA} 上にあることがわかる。また、 $\angle OSD = 45^\circ \times 2 = 90^\circ$ より、 \widehat{OAD} に対する中心角は $360^\circ - 90^\circ = 270^\circ$ 、円周角は $270^\circ \times \frac{1}{2} = 135^\circ$ となり、図 2 の (ア) の場合の点 Q は \widehat{OD} 上にあることがわかる。よって、点 Q は図 3 の円 S の円周上を動く。 $\triangle OAD$ は直角二等辺三角形であるから、求める円の直径は、 $AD = \sqrt{2} OA = 5\sqrt{2}$

図 1

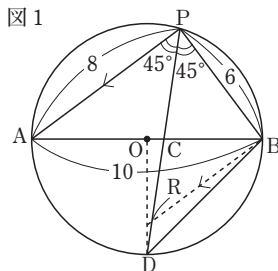
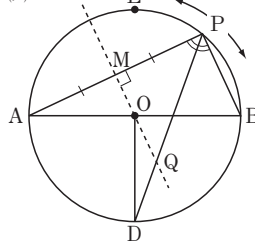


図 2

(ア)



(イ)

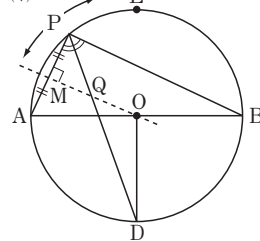
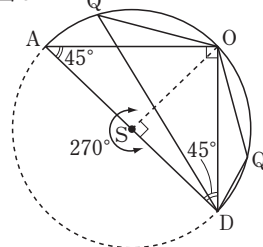


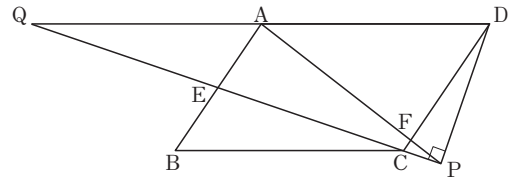
図 3



2. (1) 7 : 2 (2) $\frac{11}{36}S$

(3) (例) DA と PE の延長の交点を Q とする。△EAQ と △EBC において、仮定より、EA = EB 対頂角より、∠AEQ = ∠BEC QD // BC の錯角より、∠EAQ = ∠EBC よって、1組の辺とその両端の角がそれぞれ等しいので、△EAQ ≅ △EBC

図1



合同な図形の対応する辺より、AQ = BC また、平行四辺形の対辺より、AD = BC だから、AQ = AD 点 A は直角三角形 QDP の斜辺 QD の中点だから、AQ = AD = AP となる。したがって、AD = AP (図1 参照)



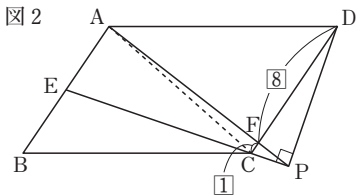
(1) AB // DC より、△AEP ∼ △FCP となるから、

AP : FP = AE : FC ここで、AE = $\frac{1}{2}AB = \frac{1}{2}DC$, CF : FD =

1 : 8 より FC = $\frac{1}{9}DC$ よって、AP : FP = $\frac{1}{2}DC : \frac{1}{9}DC = 9 : 2$

となるから、AF : FP = 7 : 2

図2



(2) 図2のように、線分 AC で台形 AECF を 2つの三角形 △AEC,

△ACF に分ける。AE = EB より、△AEC = $\frac{1}{2}\triangle ABC = \frac{1}{2} \times \frac{1}{2}S = \frac{1}{4}S$ CF : FD = 1 : 8 より、△ACF = $\frac{1}{9}\triangle ACD$

= $\frac{1}{9} \times \frac{1}{2}S = \frac{1}{18}S$ よって、台形 AECF の面積は、 $\frac{1}{4}S + \frac{1}{18}S = \frac{11}{36}S$